

響 風

Hibiki Winds



出展：小菅績憲 版画作品より（折尾駅）

あしや旬会

第 8 号

はじめに

平成二十四年十一月に吟行記は百号になった。平成十六年十月の「瀬板の森公園吟行」から書き始めて、丸八年になる。その年の5月、節子さん、光子さんとの三人句会が実現し、今まで必死でイメージを膨らませて五・七・五を作っていたものが、こんなにも気楽に俳句会を楽しむことができるものだと知り、それが月一度の定例吟行句会となり、いつそ記録として残しておくのもいいかなと思ひ、ちよūdど仕事から離れたパソコンの活用の仕方を模索していた夫に、吟行句会のホームページ作成の話を持ちかけてみた。タイミングが良かったのか、すんなり話がまとまり、あれから百回続けることができた。

ここ二年ほど夫が東京に単身赴任かつ多忙のため、ホームページの更新が遅れている。ならば自分がすればよいと分つてはいるが、ホームページ作成の難しさにお手上げ状態なのである。デジカメからパソコンに写真を取り込むこと、画像処理、ホームページ作成ソフトの扱いなど、どれもこれも任せっきりで全く自分でしてこなかったもので、自業自得なのだが、ネットで調べることが出来ても、パソコンを使いこなせない。それでも「とにかく続けること。続けることが大事」と……。そのためにも夫の健康を切に願う。

平成二十四年を振り返ると、「太宰府天満宮の鷲替え神事、鬼すべ」に始まり、一月末の昇先生との京都の「貝寄風三百回記念祝賀会」に参加。その後「針供養」「粥占」と続き、糸島半島や梅雨の大雨警報中の「宇美神社」など忘れられない吟行を一緒にすることができた。また定例会ではないが、中秋の名月と次の日の十月一日の「みあれ祭」を玄海ロイヤルホテルに一泊して見学。台風の影響で厚い雲のかかる空から、夜遅くに澄み切った丸い月が顔をだした。それを見上げながら、前回（平成二十二年）のみあれ祭吟行に、体調を崩して不参加だった佳与子さんと一緒にいることが嬉しかった。

俳句は「座の文芸」といわれる。俳諧の連歌形式から発句のみが独立して俳句という文芸になり、今では「句会」や「場」に縛られない個人の創作による句が普通になってはいるが、原点は俳諧の「共同体の心縁を深めるための座」である。吟行句会を通して仲間内で楽しい時間を過ごすことが大切で、秀句もそうでない句も全部受け入れる態度が求められるとある本に書かれている。この貝寄風の句会は、正にこれを実践している。その「場」で作られる句は、秀句とは言い難いものも多いが、その時の発見や心象をお互いが共有し、鑑賞し合い、講評し合っている。それが楽しい。仲間あつての俳句である。百回からの出発がまた新たに始まっている。一人一人の健康を願ひ、いつまでも続けていきたいと思う。

平成二十五年五月

江本由紀子

響風 第八号 目次

■はじめに

■吟行記

第八十七回	鶯替え神事・鬼すべ神事	1
第八十八回	節分祭と針供養	6
第八十九回	筑紫神社の粥占・かえる寺	11
第九十回	水城跡と都府楼跡の花見	16
第九十一回	糸島半島巡り	20
第九十二回	那珂川水上バス遊覧	24
第九十三回	宇美八幡宮	28
第九十四回	地行浜	33
第九十五回	雷山千如寺	38
第九十六回	響灘ジオトープと若松港	43
第九十七回	瀬板の森と曲里の松並木	48
第九十八回	貴船神社・レストラン「公孫樹の木」	52
■自選句		
四十四～四十五	平成二十三年十二月～二十四年三月	56
四十六～四十七	平成二十四年四月～七月	58
四十八～四十九	平成二十四年八月～十一月	60
■あとがき		

吟 行 記

(第八十七回～第九十八回)

第八十七回吟行記

平成二十四年一月七日(土)

鶯替え神事・鬼すべ神事(太宰府天満宮)

参加者 節子 光子 真理子 由紀子



「足腰のまだしつかりした今を逃したら参加は難しいかも・・・」など言ったか言わなかったか覚えていないが、ともかくこういう神事を一緒にやって面白く思ってくれそうな光子さんに話してみた。こちらは夫の単身赴任中で一人の土日。急に思い立ったことなので半ばあきらめてもいたが、光子さんは七日の美容院の予約時間を早めて快諾。

ならば宿探しで、さっそくネットで探してみる。松の内の太宰府天満宮の神事なので、近くの宿は取れないのではと思っていたが、意外にも天満宮からすぐの「グランティア太宰府」(以前の国民宿舎)に空きがある。

太宰府に泊まるとなると、近くに住む節子さんや福岡の真理子さんにも、これまた駄目もとで「鶯替神事

一月六日二十時過ぎ、新年の挨拶が用事があつたのか思い出せないが光子さんに電話した。いつも話し出すとつい長い長くなり、話はあつちに飛び、こつちに飛びして内容より「よくしゃべったわ」の感が強い。この時もいつものように始まった話だったと思うが、駄目もとで翌日七日の太宰府天満宮で行われる「鶯替え」と「鬼すべ」のことを話し、光子さんの休みの土曜日なので誘ってみた。「鶯替え」は何年前か夫と初めて参加。面白かった。

「鬼すべ」は二十一時から開始なので、帰りの電車が気になり、その時は残念ながら見えないまま帰ってしまった。毎年恒例の神事なので、いつかは「鬼すべ」も最後まで見たいと思っていたが、夜の外出を簡単には誘えないし、一人では面白くない。日にちの決まった神事なので、次に七日が土曜日になるのは六年後。

にいけますが・・・とメール連絡する。七日朝節子さんより参加メールがあり、また真理子さんからも間に合えば参加すると嬉しいメールが届く。何とも急な話だったが、思いもかけず四人集合。面白いことには目がなく、フットワークの良さを再確認した日でもあった。

皆時間を遣り繰りして 太宰府駅に十八時集合。日中の最高気温が七度の寒さだが、前日までの強い風は止んでいる。近くの節子さんは先に車でホテルにチェックイン。天満宮近くの道





はかなり混んでいたようだ。参堂入口のレストランはちょうど閉店時間で食べそこなったが、梅が枝餅の店内で温かい饅頭を食べ、天満宮の境内へと向かう。参道の往来は正月の混雑ほどでなく、広い境内に三々五々集まっているといった感じで、大桶に覆われた境内の所々の灯りが昼間の天満宮と違った神聖さをも出し出している。

まず本殿に参拝してから授与所で、今年の「木鷲」を購入。一つ千円。大小いろいろあり、底に何か書かれた小さな紙が貼られている。自分で手に取った木鷲には「感謝」の文字。言葉もあれば数字だけのものもある。「感謝」の木鷲を手放したくないのでバッグにしまい、もう一つ購入。これを手に握って「鷲替え」会場へ行くと、大きな鷲の人形を中心に注連縄で囲った斎場があり、その外側を大勢の人が取り巻いている。

十九時開始予定。あと十分。それぞれ木鷲をした若いカップル、親子連れなど老若男女が薄暗い広場に今か今かと神事待っている。十九時。禰宜が設えの壇に上がり、鷲替え神事の由来や説明を始める。いよいよ開始。注連縄の四隅の提灯の灯りが消され、太鼓の音と共に口々に「替えましょ 替えましょ金鷲と替えましょ」と言いながら互いに取り替えていく。暗闇の中での「おしくらまんじゅう」状態で、寒空の下ここだけ熱気が渦巻いている。約三分ほどだが、けっこう疲れる。太鼓が鳴り止むと同時に



灯りがつき、禰宜が「金鷲」の当り文字、または番号を発表する。皆手に持った木鷲の底の貼り紙を見る。当たった一人はさらに幸運な「金鷲」と交換できるらしい。溜息や笑い声や賑やかな声が飛び交う。これが六回行われる。中に紙の貼っていない木鷲があるのは、今年購入したものでない木鷲を持ち込んでいる不届き者がいるようだ。極端に大きいもの小さいものもあり、とにかく太鼓が鳴り止むまで替え続ける。

鷲替の動き太鼓の音でかな

節子

鷲替の木鷲両手ににぎりしめ

真理子

鷲替や父に抱かれて幼子も

真理子

鷲を手の群「替えましょ」口々に

真理子

幾人の手を経し木鷲我の手に

真理子

三回目くらいから疲れを感じるが、手にした木鷲の文字が気にいらなければ再度挑戦。節子さんのものか光子さんのものかが回り回って戻ってきた。こんなことも面白い。「金鷲」が当らなくても鷲替参加を面白いと思



後の鶯替を見て会場を離れる。

うことが、今年の幸運を運んでくるような気がする。

「鶯替神事」とは、知らず知らずのうちにいたすべての嘘を天神さまの誠心に替え、また、これまでの悪いことを嘘にして今年の吉に取り替えるという意味があり、神事の後に手にした「木うそ」はご自宅の神棚にお祀りし一年間の幸福をお祈りする。持ち帰るものだから気に入ったものに越したことはない。四人とも「金鶯」は当らなかったが、そこそこ納得した「木うそ」をバッグに入れ、最

鶯替の内へ外へと揉み合って 光子

太鼓止み鶯替の輪のほどけたり 光子

抱かれたる子と替えし鶯もう替へず 光子

鶯替の声結界をはみ出せり 由紀子

鶯替の鶯握りしめ輪の中へ 由紀子

鶯替のいよよ最後の渦の中 由紀子

二十一時からの「鬼すべ」にはまだ時間があるが、すでに境内の周りには氏子たちが準備をして待ち構えている。法被姿の氏子たちは縄で作られた鬼の角を被り、大団扇や松明をもっている。境内傍の道路では、その集団が練り歩き、煙が上がっている。初めての「鬼すべ神事」にわくわくする。



この神事は、その年の災難消除や開運招福を願い、境内の「鬼すべ堂」で行われる火祭り、八六年菅原道真公の曾孫にあたる大宰大式・菅

原輔正によって始められたといわれる。氏子約三百人が鬼を退治する「燻手」と鬼を守る「鬼警固」と、「鬼役」に分かれ攻防戦を繰り広げるとい

う。「鬼すべ」の会場は菅蒲池や国立博物館の前を通り過ぎ、遊園地のある境内の最も東側のゆるやかな坂道を登っていく。何度も参拝している天満宮だが、ここまで来る事はない。

「鬼すべ堂」と呼ばれる建物の後ろは山で、前は広場になっている。すでに人が集まっている。会場はロープが張られ、見物客は堂や広場を見下ろ

す斜面の草原に立っている。消防隊も控え、万が一に備えている。開始時間が増え、デジカメを手に前へ前へと詰め始める。

鬼やらひ点火間近の月明り

節子

いっせいに照明消され鬼やらひ

節子

天神の屋根より高く寒の月

真理子

氏子らの炭塗りの顔鬼やらひ

由紀子

二十一時。氏子たちによって運びこまれた大松明が広場に勢ぞろいし鬼す



べ堂前に積まれた生松葉や藁に御神火がつけられる。拍手と歓声の中煙と炎が高々と天満宮の夜空を焦がす。「燻手」が大団扇で煙を鬼すべ堂へ送り込み、鬼を追い出そうとすると、「鬼警固」は堂の板壁を打ち破り、堂内の煙を外に出して鬼を守る。大松明が堂内を七回り、堂外を三回りする様は、火祭りの神事として勇壮で見応えがある。鬼に向かって豆を投げるなどあるらしいが、少し遠くて細かい氏子たちの動きはわからない。松明や生松葉や藁の煙と炎が段々小さくなり、放送によって「鬼」が退治されたことを知り、「鬼すべ神事」が終了したことを知る。

大松明参道駆けて鬼燻へ

光子

寒天に高く鬼燻神事の火

光子

なやらひの闇に火の粉の舞ふさまを

真理子

藁の火に勇み立つ鬼鬼やらひ

真理子

生松葉燃やす煙や鬼やらひ

由紀子

鬼堂の方に白煙鬼やらひ

由紀子

口々に鬼じゃ鬼じゃと鬼やらひ

節子

なやらひの解散「鬼じゃ」の大声で

節子



燃え残った板壁は火除けのお守りとしての信仰があり、皆広場に降りて来て、焦げた板を一枚一枚と拾って帰る。鬼の角も持ち帰る人もいる。真似て私たちも焦げ板や角を持ち帰る。天神様の山に囲まれた広場で行われる「鬼すべ」は「鬼やらひ」であり「火祭り」でもある。風がなく火の粉が見物客の方まで流れ飛ぶことはなかった。一年が恙無く過ぎせますようにと願いながら会場を後にする。

なやらひの火燃えし木切れ得んとして 真理子

鬼燻の焦げし木端を火除けにと 光子

火祭りを見終えし足の寒さかな 由紀子

真理子さんは翌日の用事のため宿泊なし。あとの三人はホテルにて宿泊。二十三時までの岩盤浴に辛うじて間に合い、僅かな時間ながらも汗を流す。
翌日朝食後、太宰府駅にて解散。穏やかな一年でありますように!!



【「鬼すべ神事」のフィナーレ】

第八十八回吟行記

平成二十四年二月三日(金)、八日(水)

参加者 節子 光子 由紀子

節分祭と針供養(福岡市博多区・中央区)



古くから行われている神事が面白い。1月の「鷹替え」や「鬼すべ」に続き、二月は恒例のようになっていく。「節分祭」がある。どこでどういふ話になったか覚えていないが、光子さんが三日の金曜日に休みがとれ、今年も節分祭に参加することになった。

二月三日十二時に博多駅集合。光子さん、節子さんと合流して東長寺に向かう。今年は寒い日が続き、この日も雪がちらつく。防寒着に身を包み、争奪戦に耐えることのできる服装で臨む。と言っても普段とほとんど変わりはないが。東長寺では護摩焚に間に合い、すぐ横の椅子席に座って護摩木の燃やし方を見る。広い本堂に声明と煙と銅鑼や法螺貝の音が響く。護摩焚が終わると、分厚い絨毯で肩や背中を叩いてもらう。「歳徳、歳徳・」の声の中、頭を垂れて叩かれると、今年も平穏でありますようにの願いが叶うような気がする。

経本で背ナ叩かれし追儼かな

光子

よき声の誦経聞こえて寒の寺

光子

何回目かの豆撒きが始まる。端っこながら前列に陣取ると、飛んでくるのはいいが、争奪戦も凄まじい。物欲は相当なもの自身でも思うくらい地面や人の背中に落ちた福豆を拾う。

東長寺では七く八個だったと思うが、その後の榊田神社での豆撒きを合わせると、福豆三十一個、飴十七個、餅二個、ボール一個を一人で拾っている。榊田神社の最終回の豆撒きは、大箱をひっくり返すように投げるので、場所によっては上から福豆が降ってくるほどののだが、その気がなければ手に入れることはできない。各々沢山拾ったが、今年も健在でとも数少ないボールを手に入れたのが嬉しい。煩惱深き我、今年も健在である。



鍔帽に飛び込みし豆節分会

由紀子

豆撒や菓子もボールも飛んできて

光子

豆撒きや譲ってばかりはいられない

節子

豆撒の宮にけが人スリまでも

節子

節分会博多一本絞めて果つ

由紀子

二月八日、今月の本来決めていた吟行はこの「針供養」。福岡三越に隣接する警固神社の境内で毎年行われていると聞いていたので、十時半三越のライオン像の前に集合。いつもの折尾駅十時十四分の快速で博多に向かい、地下鉄で天神に行く。予定時間より少し早いので、ライオン像の近くの「福岡観光案内所」で針供養の時間など聞いてみた。とんでもないことに十時半開催で神事は三十分くらいで終了すると言う。なぜか十一時と思



い込んでいたので、慌てて節子さんと光子さんにメール。光子さんからは都合で予定時間より遅れると返信メール。節子さんからは直接警固神社に向かうと連絡あり。お二人に申し訳なく思いながら、警固神社へ急ぐ。小雪のちらつく境内に「針乃碑」があり、「針まつり」の赤い旗と、鯛や野菜の供物が供えられている。針供養ならではの豆腐が三ヶ所に置かれ、椅子が並べられていく。着物姿の男性女性が集まり、若い女性も遠巻きに集まり



始めている。禰宜が用意されたマイクの前に立ち、もう一人の禰宜がお払いの幣を両手に持ち、いよいよ始まるうとしている。まだ節子さんは来ていない。カメラで様子を写した後で二人に見せようシャッターを押す。祝詞が奏上され、前列の和服の紳士達が針を納めはじめる。見学の人も多くなつていくなか、いつの間にか節子さんが横に立っている。神事が終わらないうちでよかつたと胸をなでおろす。

針供養和裁士会の幟立ち

節子

低頭の白きうなじに風花す

由紀子

袴穿く男八人針納

節子

何故十一時開始と思ひ込んだのか、節分の豆撒きのように何回もあると思つたのか、花祭りのように何時でも数名の女性がいて甘茶を振舞つてくれるように思つたのか、未だに理由がわからないのだが、集合時間を決め自分が神事の時間を確認しなかったのは確かなことで反省。神事が終わり椅子も片付けられた後、光子さんが到着。供物と針のさされた豆腐と持ち寄られた針を入れるバケツのみが残されている。針も持って

これなかった人はバケツの中の針を刺しても良いというので、刺しても良かったが、日頃めつたに針仕事をする事がないので少しばかり後ろめたい。光子さんは自宅から用意してきた針を刺す。

糸付いた針も豆腐に針供養

節子

針供養木綿豆腐が十二丁

節子

糸つけし針もさされて針供養

由紀子

針供養終わる豆腐の角乾き

由紀子

針供養わづかなれども納めけり

光子



昼食は警固神社前の国体道路を赤坂方面に5分ほど歩いたビル五階の「博多廊」。九州の食材で九州料理をだしてくる人気店である。空き席があり、寒さに悴んだ手や体を美味しい料理で温める。

寒い時期なので、針供養の後の予定は天候次第にしていたが、「けやき通り」を抜け、そのまま大濠公園まで歩く。公園近くの「福岡県護国神社」の前にさしかかり、三人とも神社に足を踏み入れたことがないので、一度入ってみようと大きな鳥居を潜る。巨木に覆われているので、鳥居を潜るまでその境内の広さを知らなかったが、中央に芝生広場が広がっている。ここは明治元年、福岡藩主の黒田長知公をはじめ、県内の旧藩主等が明治維新で国難に殉じた人々を顕彰するため、招魂社を設立し、祭祀をおこなったのが始まりとされ、国の安泰と平和を願い建立された神社で、祭神は明治維新以後の戦役・事変下一円の約十三万柱の英霊である。英霊を祀る独特の雰囲気、境内を足早に見てまわる。



早春のブティックけやき通り店

光子

英霊の護国神社に雛飾り

節子



大濠公園入口の「広田弘毅像」（修猷館 一高 東大卒 昭十一〜十二年総理大臣）の辺りから公園内に入る。北風が強く、池周辺の柳の枝は真横に流れている。それでも市民の憩いの公園だけあって、ジョギングする人やウォーキングする

人の足音が後ろから近づいてくる。園内のスタバはほぼ満席だが、少し待って池を眺めながらの席を待つ。池は寒風に波立っている。鴎と鶺鴒が池の中央一列に打たれた杭に止まって動かない。暖かい日や餌をあげる人がいる時には、群れをなして飛ぶ鴎が杭にじっとしている様子をすぐに匂にするのは、さすが節子さんである。

鴎と鶺鴒休んでばかり泳ぐ鴨

節子

公園内の市立美術館のロビーの端で三人の句会。天神までバスで戻り解散。



【針供養神事】



【針供養神事：2】



【護国神社境内】

第八十九回吟行記

平成二十四年三月十五日(木)

参加者 節子 光子 真理子 由紀子

筑紫神社の粥占(筑紫野市原田)・かえる寺(小郡市)



三月十五日、JR直方駅より光子さんと合流して、節子さんお薦めの原田線に乗り込む。平野を走る鹿児島線と違って、両側から山が迫る原田線の二両電車から、芽吹きや山や点在する集落の家々の梅の花や辛夷の木など変化に富んだ景色を眺めながら原田駅に降り立つ。原田(はるだ)は長崎街道の一つなので、その名残はあるだろうとは思っていたが、山間を走ってきたので山の中の小さな駅を想像していた。駅舎は新しく改装され周辺には家も多い。駅前広場からの道には太陽光パネルが設置されていたり、案内板も新しく古いだけの宿場町とは違うようだ。すでに下見をしてくれ

ている節子さんの案内で、筑紫神社まで歩く。今月の吟行はこの神社の「粥占(かゆうら)」。まだ一度も見ることがない。

山迫る肥前街道木の芽風

真理子

積み上げて春椎茸の櫓木かな

光子

ボタ山は三角形に山笑ふ

節子

粥を用いて一年の天候や作物の吉凶を占う行事は、かつては全国的に、神社のみならず部落や一族の自家などで共同で行なわれていたとされるが、そのほとんどが行なわれなくなり、神社のみ祭礼として残っている。九州では、北部九州(福岡県、佐賀県、大分県西部)を中心として行なわれているようだ。神社や地域によって仕方が違い、小正月に神にあずき粥を献



ずる時に行なわれ、煮え上がった粥の中に棒を入れてかき回し、棒についた米粒の数で占うものもあるという。

この筑紫神社では、二月十五日（旧暦小正月）に「粥入れ」といって、粥を炊き、鉢に盛って木箱の中に入れ、封印して神殿に納める神事が行なわれ、一カ月後の三月十五日早朝、卯の刻（午前六時）に粥を木箱から取り出し、粥の黴の生え具合で作物の豊凶などを占う神事が行なわれる。これは筑紫野市の無形民俗文化財に指定されている。

小正月粥占ひといふ神事

節子

如月の粥占の神事あり

光子

駅から十分ほど歩くと大きな鳥居が見えてくる。鳥居を潜ると、注連縄の張られた井戸と池がある。まっすぐ高い石段を上りお参りを済ませる。本殿前の長机に集まっている法被を着た氏子の男性に話を聞きながら、粥占の箱を見せてもらう。

銅製の粥鉢に柳の箸を十文字に置き、仕切られた四箇所それぞれ「豊前」「筑前」「筑後」「肥前」の名札が立てられている。粥の黴なので、白いふ



わふわした所もあるし、黒い点々や黄味がかった所もある。決して美しいものではないが、仕切られた四箇所の黴の生え方が違う。判定結果が紙に書かれて貼っている。全般的に「中



いと漬物とお茶をいただく。

の上」と出ていて、風水害も流行病も「なし」「兆しなし」とあり、順位は「筑前」が一位となっている。当るも何とか当らぬも何とかだが、嬉しい結果にほっとする。

境内の小さな小屋では、白いエプロン姿の婦人たちが直会の準備をしている。横のテントにはテーブルと椅子が置かれ、見学者も出来立ての「ぜんざい」を食べるようにすすめてくれる。氏子たちが集まって食事する前のほうがよさそうなので、勧められるまま熱々のぜんざ

粥占の中の上とや春の風

由紀子

黴の粥つぶきに眺め占ふと

真理子

四菱の神紋法被春祭

節子

粥黴に占ふ吉よ梅の宮

由紀子

巨木で覆われた境内には、「筑前と筑後を合わせて筑紫という・・・」の碑文が立ち、紅梅や枝垂れ梅が咲き残っている。由緒あるこの古い神社は日頃森閑としているだろうが、桜の木が南側に沢山植えられていたので、



桜の季節には花見客で賑わいそうだ。今年は寒さで全般的に花の開花が遅れている。桜の花芽もまだまだ固く、しばらく咲きそうにないが、神社の石段を下り、注連縄をしている井戸（この水で米を磨ぎ、粥を炊くらしい）や池の辺りの径にある一本の桜の木に四く五個開いているのを見つける。初花である。散歩中の初老のご夫婦も立ち止まっている。車の通らない緩やかなその坂径を幼稚園児の集団が楽しそうに保育士と一緒に通り過ぎて行く。

水温む浮葉の茎のゆらぎ見え

光子

園児らになずなはこべらいぬふぐり

節子

山笑う筑前筑後地つづきに

光子



十八ヶ所」の三番札所であり、福岡県重要文化財の「如意輪観音立像」をご本尊にすることで有名なお寺だが、一般的には情報番組で取り上げられる「かえる寺」としての方が名前が知られている。そう広くもない境内に約三千体の石像や置物が並んでいるらしい。この時間は私たちのみだったが、立ち寄る人も多いようである。

庭には花木がたくさん植えられ、白い椿が美しい。紫陽花はきれいに剪定され、六月には紫陽花寺のようになるだろう。ただ寺の内も外も「かえる」だけである。「かえる」という言葉には人を惹きつけるものがあるが、ここまでやるかというほどの「かえる」の置物に商魂の逞しさを覚える。

近くの美味しいうどん屋で昼食をす

ませ、節子さんの車で、如意輪寺・通称「かえる寺」に向かう。この寺は九州を一周する壮大な巡礼霊場「九州八

白椿一枝剪りて御仏へ

光子

春埃拭く寺守の声やさし

由紀子

如意宝珠春の景色をさかしまに

真理子

二羽三羽鵲翔ちし春田かな

由紀子



小郡市総合保健福祉センター「あすてらす」の広い休憩所の窓際のテーブルにて十句の句会。小郡市は福岡、佐賀の県境であり、福岡県内の筑前、筑後の境でもある。ここまで足を伸ばすとは思わなかったが、どこも初めてのところで、福岡は見所の多いところだと再確認する。「あすてらす」の「満天の湯」という温泉に入り、一日の吟行句会を締めくくる。西鉄大牟田線「三沢駅」まで送ってもらい解散。



【筑紫神社の「粥占」】



【原田の街】



【筑紫神社】



【かえる寺】

第九十回吟行記

平成二十四年四月五日(木)

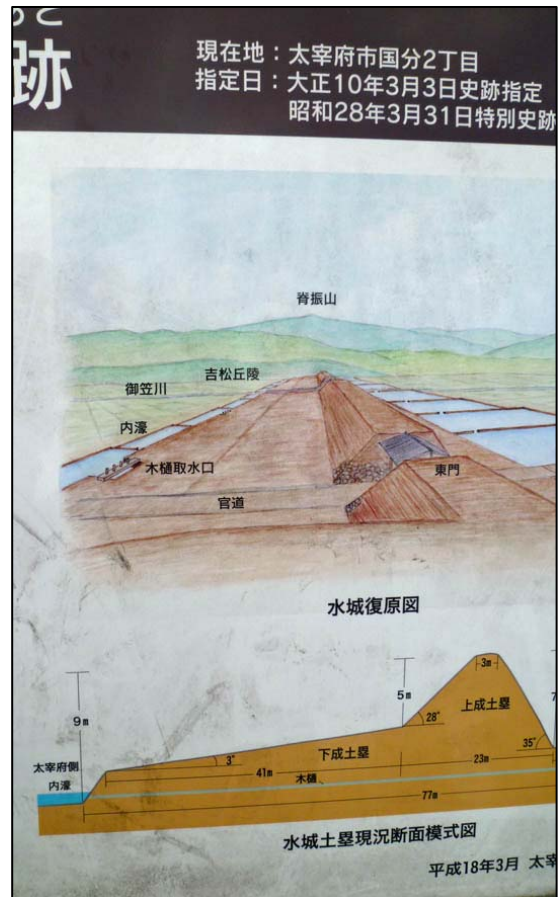
参加者 節子 光子 真理子 由紀子

水城跡と都府楼跡の花見(太宰府市)

今年は正月から暖かい日が少なく、木々の芽吹きも花の開花も全般的に遅い。毎年の開花がいつになるのが話題になるが、今年の福岡の開花宣言は三月二十七日。平年より四日遅く、昨年より五日遅かった。今年の花見を太宰府近辺でしようということになり、都府楼跡と、まだ行ったことの水城跡での花見となった。四月五日は史跡での美しい桜が期待できそうだ。

四月五日、JR水城駅十時半集合。大野城駅と二日市駅の間の普通電車のみ停車する駅なので、吟行でなければ、なかなか降り立つことがない。節子さん、真理子さんはすでに到着して、駅前を散策している。節子さんの車で水城跡に向かう。

水城は、大和朝廷が大宰府政庁を守るために築いた土手。現在では国道や高速道路やJRなどで分断されているので、小高い土手が所々に残されているのみというが、一度は足を運びたい旧跡である



「水城」について調べたことを書き留めておく。

- ① 日本書記の記述・「筑紫に、大堤を築き水を貯へ、名付けて水城と曰ふ。」
- ② 「水城」とは六六四年に唐と新羅の攻撃に備えて築かれた太宰府の防衛施設である。大和朝廷は、大陸に一番近く盛んな交流と進んだ文化を取り入れる北部九州の拠点の太宰府を、都から離れていたにもかかわらず重要な場所としてきたが、六六三年の「白村江の戦い」で唐や新羅の連合軍に敗れたため、その進攻に備える必要があった。水城の他に、大野城や基肆城(きいじょう)の山城も築き、また対馬、壹岐、筑紫国に防人や烽火(のろし)を備え、太宰府の防衛に力を注いだ。
- ③ 「白村江(はくすきのえ)の戦い」・唐、新羅に滅ばされた百済復興のため、日本は六六一年援護軍を派遣したが、ここで壊滅的に敗れる。
- ④ 水城の規模は、全長一・二キロ、基礎部の幅八十センチ、高さ十メートルを超える人工の土塁。

④博多湾側に幅六十センチ、深さ二〜四メートルの外濠が造られ水が貯えられていた。

実際目の前の「水城跡」は、その歴史を知らなければ単なる川のない土手であるが、土手に沿うように植えられている桜は満開で、親子連れが遊びにきている。やわらかな草を踏みながら土手に登ると、樹木を伐採している。繁りすぎないように整備しているようだ。

筑紫野に満つる春光水城跡

光子

教習所水城のそばに出来て花

節子

雨蛙ものにとまりて水城跡

節子

花飛んで水城の丘に降り注ぐ

節子

花の屑水城の丘の小径にも

節子



少し高い広場になっている所から眺めると、国道と建ち並ぶ家々の向こう側に小高い土手が同じように桜が植えられ、西側に延びている。それも水城跡らしい。博多の街に続く北側は広く展げ住宅がずっと建ち並び、南側の

太宰府方面は山々が連なっている。

この場所に政庁を置いて、他国の侵略を警戒しながら統治したのが納得できる地形である。

昼食は都府楼近くの「田惣」。以前にも利用したことがある民家風の和食のお店で、掘り炬燵式のテーブルに季節の料理が並ぶ。ゆつくりおしゃべりや句作のできるのがよいが、ついつい長居をしてしまいそうである。

次の吟行地「都府楼跡」も桜は満開で、多くの家族連れが遊びに来ている。

花見客は花の下でシートを広げ、お弁当を食べたり、子供たちも大人もシャボン玉遊びをしたり、ボール遊びしたり、楽しそうに遊んでいる。都府楼跡の傍を沿うように川が流れ、桜の木が植えられている。桜の花は時折花吹雪となり、川にも都府楼跡の礎石にも降り注ぐ、絶好の花見となる。大きな礎石に皆で座り、節子さん持参の野点のお抹茶をいただく。車で運ぶとはいえ、ここに野点の用意をしてくる節子さんの心遣いに感服。



駆け回る子らに散る花都府楼跡

節子

花の屑背中合わせの大礎石

節子

都府楼の礎石に座る花見かな

節子



若草の息吹きみなぎる都府楼址

真理子

花吹雪四王寺山へと吹き渡り

真理子

しゃぼん玉横ぎまの風追いかけて

真理子

いしずえの語るいにしえのどかな

真理子

花の屑あつめて母の手のひらへ

真理子

縄跳びを大きく回し花の下

光子

シャボン玉風のさらひて大空へ

由紀子

午後三時すぎになると風が少し強くなり、散る花は吹き上がるように都府楼跡の空を流れていく。水城、都府楼を巡る花見は、贅沢と思えるほど満開で至福の時間を過ごすことができた。
近くの資料館を見学し句会。駅まで送ってもらい解散。



【都府楼跡の桜】



【水城跡と桜】



【都府楼跡と資料館】

第九十一回吟行記

平成二十四年五月十一日(金)

参加者 光子 真理子 由紀子

糸島半島巡り(糸島市)

今月は初夏の糸島半島を吟行することに決まる。一度は行ってみたいと思っていたが、交通の便が良いところではないので、なかなか行けずにいたが、糸島市の近くの西区に住む真理子さんに全てお任せして吟行日を迎える。

五月十一日(金)福岡市営地下鉄室見駅十時三十分集合。真理子さんが駅近くで待っている。停めてあった真理子さんの車に光子さんと乗り込み出発。行き慣れた道らしく、交通量の少ない道を選んで、すいすいと滑らかに運転するので、後部座席の二人は存分に外の景色を眺めることができる。



能古島に渡った姪浜や「生の松原」「今宿」を通り過ぎ、糸島半島へと海沿いの道を走っていく。新緑と青い海が美しい。糸島の澄んだ空気は美味しい野菜や魚、卵を産出し、福岡市民の台所となっている。

まず到着したのが「東林禅寺」。玄界灘に突き出た半島の漁港は、海から直ぐ高い山になっていて、こじんまりとした家々は坂や階段になっている路地を挟んで建ち並んでいる。階段をまっすぐ上ると、小さな山門が見える。ここには万葉歌碑や座禅石、夫婦杉などがあって魅力的な寺であるが、何といってもこの境内から見る景色は絶景である。青い海に浮かぶ島々をしばらく眺める。



座禅石庭のつづきにほととぎす

真理子

天草を広げ万葉歌碑の寺

真理子

芍薬に病み棲む坊が妻ひとり

真理子

石踏ぶきのくきも摘まれてかたわらに

真理子

老鶯のしきりや海を見下ろしに

光子



目を患っているらしい住職は出てこなかったが、本堂にお参りさせていただく。真理子さんの説明では、この寺の門徒は、以前地震で大きな被害を受けた玄海島の人がほとんどらしい。

境内は広いとはいえないほどだが、回りに野菜や花を美しく育て、天草なども干しているのを見ると、住職の人柄がわかるような気がする。

坂道の家々に咲かせている花を見ながら禅寺を後にする。近くにある昼食予定の寿司レストランは最近テレビで紹介されたくらく満席だったが、運よく早めに席が空き、人気メニューの野菜寿司のランチコースにする。カウンター席の前で寿司職人が握っている。その後ろが全面ガラス張り、海を見ながらお寿司を食べる。なかなか粋である。

どの辺りを走っているのかわからないが、次に案内されたのが「二見ヶ浦」。これはテレビや雑誌で見たことがある。糸島の一番の観光スポットかもし

れない。新しい注連縄の夫婦岩に白い鳥居。大海原から寄せる波は現地でしか体感できない迫力がある。私の住む若松北海岸の海より広く大きく迫ってくる。

大卯浪玄海灘の風を得て

由紀子

沖はるかすでに碎けて立つ卯浪

光子

波の音少し離れて若葉風

真理子

「二見ヶ浦」から、毎年KBCオーガスタのゴルフ大会が開催される「芥屋ゴルフ倶楽部」の前を通り過ぎ、筑紫富士と呼ばれる「可也山」の麓を抜ける。途中「つまんでご卵（らん）」の直売所に立ち寄り買い物。少々高めの卵だが、珍しいものに目がない二人は、さっそく購入。半島を一巡りした後は、温泉でもということになり、弘法大師ゆかりの「まむしの湯」に浸かって潮風をあびた体をさっぱりさせる。吟行というより観光気分です。存分に糸島を満喫した一日となった。福吉駅まで送ってもらい解散。





【「二見ヶ浦」の】夫婦岩

初めての糸島巡りだったが、調べれば調べるほどに歴史ある魅力的な場所で景色も素晴らしい。また全員集まって吟行したいと思う。

伊都国の浦巡り来し花あふち

由紀子

怡土の浦々に咲き初め花棟

真理子



【食事処「空」】





【直売所と「まむし温泉」】



【東林禅寺の座禅石】



【「三見ヶ浦」の鳥居と夫婦岩】

第九十二回 吟行記

平成二十四年六月十五日（金）

参加者 節子 光子 由紀子

那珂川水上バス遊覧（福岡市中央区）



六月十五日、今にも降り出しそうな空を見上げながら、博多駅から天神までバスで行く。「アクロス福岡」に十時十五分集合予定。この近くの「福博であい橋」から博多港（ベイサイドプレイス）まで、去年から水上バスが出ているというニュースを聞き、福岡の街を川から眺めるのも面白いと計画する。問題は天気。この水上バスには屋根がないらしい。水上バスの第一便は十時三十五分。この辺りは旧県庁跡地を再開発した場所で、アクロス福岡、福岡市役所、広い天神中央公園などがあり、繁

華街中洲と天神のオアシスのような所だが、買い物で行く天神なので、商業ビルの名前は知っていても、「福博であい橋」がどの橋なのか分からない。アクロスに集合したものの、心配していた雨がポツン、ポツンと降り始める。

出港しなければ辺りを散策するだけでも思っていたが、「水上バス乗船場」の旗を見つけ、船頭らしい若者が立っているの、出港の予定を聞くと一便は予定通り出港するらしい。背広姿の中年男性が一人傘をさして乗船している。

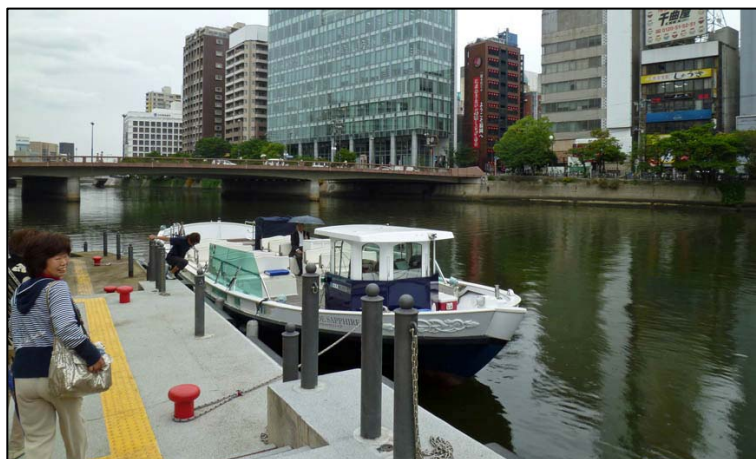
少し離れたところに繋がれている屋根付きの屋形舟は夜の遊覧用で、昼間の遊覧には使用しない。恨めしく空を見上げては晴れそうにない。水上バスは白い小奇麗な舟で座布団を備えた椅子席になっているが、やっぱり屋根がない。薫風を切って走るのではなく、どんよりとした梅雨雲からの雨に傘をさしながら乗り込む。舟は予定通り岸を離れる。

「であい橋」より舟に乗り梅雨の川

由紀子

水上バス梅雨傘さして乗り込みぬ

由紀子





屋形船繋ぐロープに五月雨るる

由紀子

乗船の片道切符梅雨の川

節子

遊船の船頭若き二人なり

光子

若者の一人が舵を取り、もう一人がマイクを持って川から眺める博多を案内する。客は中年男性と私達の四人。つつこみを入れればすぐに返ってきそうなノリの良い若者だが、背広の男性は一言も声を出さず、こちらも傘をさしながら中洲の風景をじっと眺める。どしゃぶりではないが、雨はだんだん強くなってくる。雨に打たれながら案内のマイクは淡々と説明を続けている。那珂川から中洲を挟んで博多川となるとどこに水門が見える。街を歩いていても分からない風景が見えてくるのが面白い。いくつもの橋を潜り、中洲を離れて倉庫群のある港へと進んでいく。もともと船の運航を想定していない川なので、潮位の高い時には頭を低くしたり、欠航もあるらしい。

ボートレース場や停泊中の大型客船を眺めながらベイサイドプレイスの波止場に到着。

水上より見上げる梅雨の博多かな

節子

座布団が救命用具梅雨の舟

節子

梅雨の波止水バスにジャズ流れ

節子

博多川水門あいて梅雨に入る

光子

屋根のない遊船に雨強まり来

由紀子

戻り来し乗船客も梅雨に濡れ

節子



志賀島や壱岐行きフェリーが出ているので、乗客が列をなしている。乗ってきた水上バスは乗客なしで雨の中を戻っていく。フェ



リーの出た波止場はがらんとしている。大型水槽の魚を暫く眺め、節子さんの勧めで「博多ポルトタワー」の展望室に上ってみる。360度の視界に思わず歓声。雨にけぶる湾、遠くの島がうすうすと見える。帰りはバスに乗ってアクロス福岡まで戻る。アクロス福岡は、国際・文化交流の拠点として一九九四年開業した公民複合施設である。建物の南側の段状のステップガーデンは、昨今はやりの「緑のカーテン」を先取りした斬新なもので、隣接の天神中央公園と一体化して、福岡市一番の繁華街・中洲と天神のオアシスになっている。

「福博であい橋」は武士の住む福岡部と商人の町・博多部を分ける那珂川に架かる橋。近くに「旧福岡県公会堂貴賓館」がある。桜の木に囲まれた中央公園にひっそりと且つ優美に存在感を示している。

明治四十三年九州沖繩八県連合共進会の開催時の来賓接待所として建て

られたもので、その後大正時代は「福岡連隊区司令部」として、また戦後は、厚生省民生部、福岡高等裁判所、水産高等学校、農林事務所など国、県の事務所として、そして昭和三十一年から昭和五十六年県庁が東区に移転するまで、福岡県教育庁として使用されている。

梅雨傘をたたみ明治の館へと

光子

教育庁の移転後、明治時代のフレンチルネッサンス様式の木造公共建物の重要文化財として保存されることになり現在に至っている。とんがり屋根の一階にレストランがあるので昼食をとる。カレー、ハンバーグなど種類は多くないが、雰囲気でも美味しく感じられそうだ。珍しいからと注文したのは「そば粉のガレット」だったと思うが、味を思い出せない。建物が重要文化財なのでガス火などは使うことができないらしく、多くのメニューはないが、天神のど真ん中でレトロな雰囲気を味わうことができるので、お薦めのお店である。

昼食後、建物内を見学。二〇〇五年の福岡県西方沖地震で大きな被害を受けたが、その修復を終え現在に至っている。説明を聞きながら一通り館を見学し、「であい橋」を渡って博多部の近くのホテルオークラの一階喫茶室にて句会。通りには博多山笠の小屋が出来つつある。

あと二週間すれば、この辺りは山笠一色になる。初めての追山笠を見た時の興奮、土砂降りの中の追山笠、それぞれ面白かった山笠を思い出しながら、雨の強まる中解散。

山笠の小屋に槌音祭り前

由紀子



【であい橋】



【「であい橋」の三人舞妓銅像】



【組立中の「飾り山」】



【水上バスから見た豪華客船】

第九十三回 吟行記

平成二十四年七月十三日（金）

参加者 節子 光子 真理子 由紀子

宇美八幡宮（糟屋郡宇美町）



今年の七月十一日から十四日に「平成二十四年北部九州豪雨」と命名されるほどの豪雨が、熊本県、大分県、福岡県を襲った。川の氾濫、土砂崩れなどで、連日あちこちで被害状況がテレビで放映されていた。その最中の十三日の吟行である。場所は博多駅から約十キロほど山側に入った「宇美八幡宮」という古くから安産祈願で有名な神社。

前日十二日は熊本の阿蘇地方の白川の氾濫があり、十三日の当日は大分の日田、中津地方に警報が出ていた。福岡は雨の予報ではあったが、警報は出ていなかった。予定通り電車に乗り、集合場所の宇美駅に向かう。それでも時折激しく雨が降るので、車で四山寺山を越えて来る節子さんを心配し、場所変更も考えたが、運転中なのか連絡がつかない。香椎駅から電車を乗り換える頃には雨は止み、真っ黒な雲も消えている。このまま雨が止むか小降りになることを願うばかりだ。

集ひたる終着駅の黒南風に

真理子



十三日十一時四十分宇美駅集合。節子さんと真理子さんは車で、光子さんは直方経由の電車で、由紀子は電車を香椎で乗り換えて宇美駅に辿り着く。電車は雨の影響で少し遅れがあったが、無事全員集合。

雨は小降り、すぐに車で宇美神社に向かう。境内に入ると、守札授与所の中で少し動きはあるものの参拝客はいなく、神門に置かれている夏越祭の案内や子供の書道展の展示、七夕飾りなどを見て回る。境内は大楠で覆われているが、本殿横の大楠は特に樹齢二千年以上の大樹で、県の天然記念物に指定されている。一本で「湯笠の森」と名づけられている大樹は、自然と手を合わせるほど神が宿するような気を漂わせている。裏手にも同じ

ように「衣掛の森」という洞のある楠大樹も樹齢二千年以上といわれている。境内には他にも大樹はあるが、注連縄を張られたこの二本の大幹に圧倒される。

一木で森なす古木梅雨深し

光子

衣掛の大木は楠梅雨の中

節子



「衣掛の森」の大樹の奥に「産湯の水」、本殿裏には「子安の石」が沢山置かれている。この八幡宮の安産祈願の謂れは、神功皇后がこの宇美の地で応神天皇を出産されたことに由来する。こぶし大の「子安の石」は、安産の祈願を終えてから、お産の鎮めとして預かって持ち帰り、御願成就の

際には、別の新しい石に生まれた子供の名前を書いて、お宮参りの祈願のお祓い後、預かった石と共に新しい石を添えてお返しをする。それらの石が沢山置かれているのは、それだけ信仰を集めているのだろう。この日は吉日だったのだろうか。この雨の中をお宮参りの一家族が本殿に上がっていった。雨脚は強まり、雷も鳴り出す中、祈願の太鼓が境内に響く。祈願が終わると家族皆で子安石の方へと傘をさしながら行っている。見ている我々も幸を願う。

雷鳴に神鼓打つ音重なりて

光子

楠青葉祈願の子安石積まれ

由紀子

境内の裏手から出て奥宮へと行こうとしたが、まだ鳴る雷に引き返す。奥宮へつながる橋の下を流れる川は茶色の濁流で流れも速い。本殿のある境内に戻り、社務所横の葭簀で囲まれた休憩所を見つけ句作。雨が強くなり駐車場の車へと移動する。

奥の宮までの雷いつまでも

節子

上宮へ梅雨の川越す橋かかり

光子

雨の粒葭簀を横に伝ひをり

真理子

宇美町から隣の須恵町へ車を走らせる。若杉山の麓の皿山公園内の隠れ家のようなレストランで、一目で美味しいと思うような素敵なお店構えであ



る。実際に注文した「やまもも弁当」はびっくりするほど安くで美味しい。店内から見える公園の庭は山へと続き、降ったり止んだりの雨も、山の緑を濃くしているように感じる。人気店らしくこの日も客でいっぱい。食事後、ケーキを注文してゆっくり句会。ほとんどの客は帰り、静かになった店内の七夕飾りと壁に掛けられた一輪の花に、ありがたうの声をかける。大満足の食事処「やまもも」を出て駅まで送ってもらい解散。(帰りのJR鹿兒島線は電車の運休や遅れで駅構内は混雑したが無事帰宅)

あたたまるものも一品夏料理

光子

いやいやに好きな杏のケーキ分け

光子



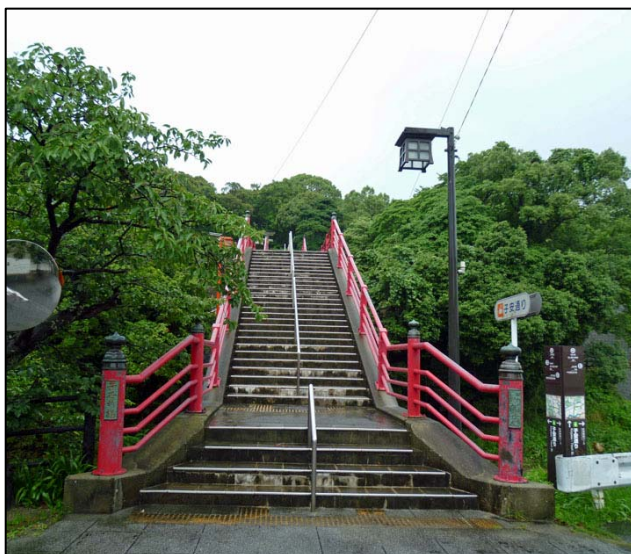
【食事処「やまもも」】

次の十四日には、柳川市、八女市、うきは市など県南の川が氾濫し大きな被害がでた。この宇美町辺りも被害のテレビ放送はなかったが、かなりの雨量だったと思われる。一日違いで吟行はできたが、年々大きくなる自然災害に不安を覚える。



【樹齡二千年以上の大楠】

【奥宮への橋】



【宇美八幡宮 境内】



【食事処「やまもも」店内】



【「やまもも」よりの風景】

第九十四回吟行記

平成二十四年八月三日(金)

参加者 節子 光子 真理子 由紀子

地行浜 (福岡市中央区)

梅雨の豪雨が去った後は、猛暑が続いている。各地の最高気温を見ると、三十四度、三十五度。もう驚くこともなくなったが、スコールのようなゲリラ豪雨や竜巻など、今までにない災害に地球温暖化の脅威を思うこの頃である。あまりの暑さと天候不順に、吟行地は涼しくて景色のよい所が良いだらうと、博多湾を一望できる「ヒルトン福岡シーホーク」に決定。

当日八月三日、やはり朝からうだるような暑さで、予想最高気温は三十五度。冷房用の上着と晴雨兼用の折りたたみ傘を用意して十一時三十分、「シーホーク」5階の中国料理店「望海楼」前に集合。早目に着いたので、



周辺を少し歩くが何とも暑く、デジカメで写すのが精一杯。早々に集合場所へ向かう。予約しておいた席は窓から博多湾を一望し、糸島半島、能古島、志賀島などが見える。夏の青空と海をガラス越しに見ながらランチを食べる。開店と同時に席に着いたので一番乗り。正午を過ぎるとほぼ満席になったが、座った席は店の入口から真直ぐの窓際で、他のお客と少し隔たりがあり比較的静かである。節子さんが兼題の溝萩を自宅から持ってきている。皆手に取ってみる。

八月の雲また海の色変はる

真理子

能古島上空夏の雲ひとつ

節子

溝萩を手にして博多ごりよんさん

光子

暑いだろうが、浜辺まで下りて少しでも吟行しようということになり、シーホークを出て直ぐの松原から海を眺める。五階からの景色と松原からの景色は、全体としてほぼ同じなのだが、横を流れる樋井川の河口で釣りをしている人、魚の飛び跳ねる様子、家族連れが海に入って泳ぐ様など、人やその他の動きがよく見える。炎天下の砂浜に入る元気はなく、砂浜に沿った松原の石段に座って作句。三十五〜四十分



の短時間で、それぞれに目に留まった景を、すぐさま句にする。

浜木綿に浜の監視は暇らしく
光子

遊泳のブイの近くに魚跳ねて
光子

浚渫の船るる航路雲の峰
光子

何の鳥炎暑の浜を低く飛び
由紀子

遊泳の人等に離れ魚跳ね
由紀子

雲の峰立つ海が好き夏が好き
由紀子

風に向き飛んで流され赤とんぼ
真理子

潮風にのり浜木綿の香りくる
真理子

松原に鳴きながら飛ぶ蝉のいて
節子

炎天のマンホールよけ猫の行く
節子

松原に座る四人の上を、蝉が鳴きながらどの松の幹にも止まらず飛んでいった。皆目で追いながら句を作る。目の前の海にはボラらしい魚が何度



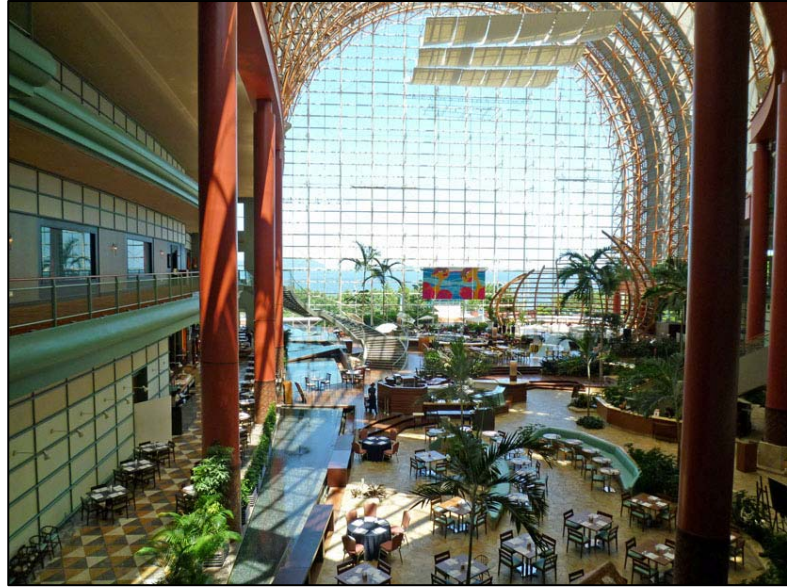
か飛び跳ねている。「跳ねているね」と言っって一句。「浜木綿が咲いているね」とまた一句。短時間で纏めあげるのも面白い。

松原の木陰とはいえ、外は三十五度の猛暑。浜辺はシーホークのプライベートビーチになっているのかどうかは判らないが、平日なので遊泳する人は少ない。砂浜に踏み入れる足元が暑そうだ。その家族連れも引き上げ始める。我々もそろそろと腰を上げる。シーホークの天井の高いアトリウムレストランで紅茶を飲んで十句の句会。

帆を張りて夏の海辺のレストラン
光子

夏の空ホテルと病院向き合ひて

光子



「ホークスタウン」内にシーホークホテルとヤフードームが横並びにあり、道を挟んで「国立病院機構九州医療センター」がある。どちらも約二十年ほど前、埋め立て地に建ったものである。川を隔てた百道浜にも博物館や福岡タワーが建つなど、この辺りは福岡の観光名所であり、最先端をいく一帯である。何気なく歩いていたが、ホークスタウンに遊びにきている人と最先端の医療を必要として

いる人が向き合って、同じこの夏の空を眺めているのだと光子さんの句が教えてくれる。俳句とは、どこにその人の目が向いているかが、直ぐに判るものだと改めて思う。

シーホークホテルのバス停から天神まで向かい解散。



【地行浜】



【シーホーク&ヤフードーム】



【地行浜よりの「福岡タワー」】



【地行浜よりの「能古島」】



【百道付近の風景】



第九十五回吟行記

平成二十四年九月十四日(金)

参加者 節子 光子 真理子 由紀子

雷山千如寺(糸島市)

九月十四日金曜日。朝から本降りの雨だが、午後にかけては晴れの天気予報。福岡市営地下鉄室見駅に十時四十分集合。雨の室見駅に迎えの真理子さんの車が待っている。さっそく乗り込み、出発する。

福岡市西区から糸島方面は真理子さんの生活圈なので、全ておまかせして車窓の景色に見入る。前回は糸島市の半島を巡る海のコースだったが、今回は福岡県と佐賀県の県境に位置する雷山の中腹にある雷山千如寺(らいざんせんによじ)を案内してくれる予定になっている。

室見駅からどこをどう走ったのかわからないが、日向峠と書かれた山道



を抜ける。ここで肉屋さんの経営している美味しくて安いと人気の食事処で昼食。ボリューム満点で美味しい。隣の直売所には糸島産の牛、豚、地鶏はもとより、カエル、ウサギ、ヘビなど普通の店頭では見かけない肉も置かれているので、どういう人が買っていくのだろうと思いつつ、もの珍しさで見て回る。周りには稲田や野菜畑や菊畑が広がっている。この辺りの肉、魚、野菜、米は評判がよく、隣接の福岡市などに出荷されている。

山一つ越えて伊都国稲の秋

由紀子

売物の丈を揃えて畝の菊

由紀子

糸島市は、二〇〇九年糸島郡志摩町、二丈町、前原市の二町一市が合併して現在に至っている。山海に恵まれた広い面積を持つ風光明媚な土地で、且つ歴史的にも古い。市内各地で縄文時代の土器が発掘されたり、中国の「魏志倭人伝」には、糸島半島に「伊都国」が栄えたという記述もみられるほどで、九州大学の伊都キャンパス移転の折には、遺跡からの出土品が多く、新聞を賑わしたのも記憶に新しい。歴史を知るほどに魅力が増す糸島である。車は糸島富士と呼ばれる可也山(かやさん)を遠くに見ながら、再び山道を上り始める。

吟行地の雷山千如寺は、西暦七二五



年に天竺（てんじく＝インド）の僧清賀上人（せいがしようにん）が開創したと伝えられている古刹。紅葉のシーズンには大渋滞するらしい寺への道は、この日はすれ違う車も少なく、駐車場にも二〜三台で、雨上がりの木々に囲まれている。静かな境内に入る。まず目に入るのが境内の大楓。樹齢四百年の楓の太木は添え木に支えられながらこんもりと枝を伸ばしている。この楓の紅葉を目当てに観光客が押し寄せるらしく、テレビにもよく取り上げられる。その映像は見たことがあるが、実際に寺を訪れると、楓も良いが、苔生す庭や回廊が清々しく、京都の山寺を訪れたような気になる。

パンフレットを読むと、奈良時代や平安時代には七堂伽藍が並ぶ荘厳な寺院だったようで、鎌倉時代には木造十一面千手眼観音像や、清賀上人の座像が奉納され、坊舎も約三百もあったらしく、室町時代には現在の聖天堂や心字庭園が造られ、宝暦二年（一七五二年）には福岡藩主の黒田継



高公が現在の寺である大悲王院を建立したと書かれている。本堂や回廊を渡った開山堂の中には国指定の重要文化財「木造十一面千手眼観音像」や「木造清賀上人座

像」が安置されている。本堂に座ると見学者のためにお経を唱え、丁寧に寺の説明をしてくれる。四メートルを越す十一面千手眼観音像に圧倒されながら手を合わせると穏やかな気持ちになっっていく。

見上げたる千手観音秋の灯に 真理子

三百の坊ありし寺法師蟬 由紀子

鳴きやめば又すぐ次の法師蟬 節子



回廊を上り開山堂の中を見学し濡縁に座る。蟬の声に周りの山々から霧が湧き上がっている。緑の中の五百羅漢や眼下の心字池の様が美しく、皆しばらく座って句を作る。開山堂は国東半島の富貴寺大堂の様式を参考に平成二年に再建されたものらしい。

回廊に立ちこめる霧羅漢にも 光子

霧白ふ五百羅漢の谷深く 真理子

雷山の開山堂や秋の雨 真理子

雨脚のひまをつくろひ秋の蟬 真理子

県境の山消えて霧湧き上がる 由紀子

霧流れたちまち山の峰又尾 節子

るりとかげ見守る四人四つん這い 節子

境内を少し散策して次の吟行地へ向かう。山道を下り伊都国歴史博物館や伊都民俗資料館が近くにある「ファームパーク伊都国」へ着く。都市と農村の交流拠点施設ということで、自然と触れ合うイベントが開催される農園や大工仕事のできる「トンカチ館」、あひるや山羊の小屋などがあって、糸島の農業をより多くの人に体験を通して知ってもらおう交流の場のようにだ。無料開放しているようなので、山羊小屋や農園を見て回る。雨上がり

の気持ちのよい風が吹き、近くを流れている川には小魚が泳ぎ、土手には桜の葉がうっすら色づき始めている。

なつめの実生りて農小屋人気なく 真理子

鶺鴒の逃げずに枝を移りけり 光子

放たれし山羊食み残すねこじやらし 由紀子



句会場は「田園喫茶 ワイルドベリー」。ワイン蔵も備えた洒落た喫茶店で、全面ガラスの窓から稲田の広がりが見えるように椅子が窓に向けられている。句会時には広いテーブル席を使わせてもらい心地よい時間を過ごす。

帰りには、人気のある道の駅「伊都菜彩」で買い物。閉店近くなっていたので商品が少なくなっていたが、糸島産の肉や野菜を少し購入。福岡市西区の地下鉄の駅まで送ってもらい解散。車で案内の真理子さん ありがとうございます。見所の多い吟行でした。



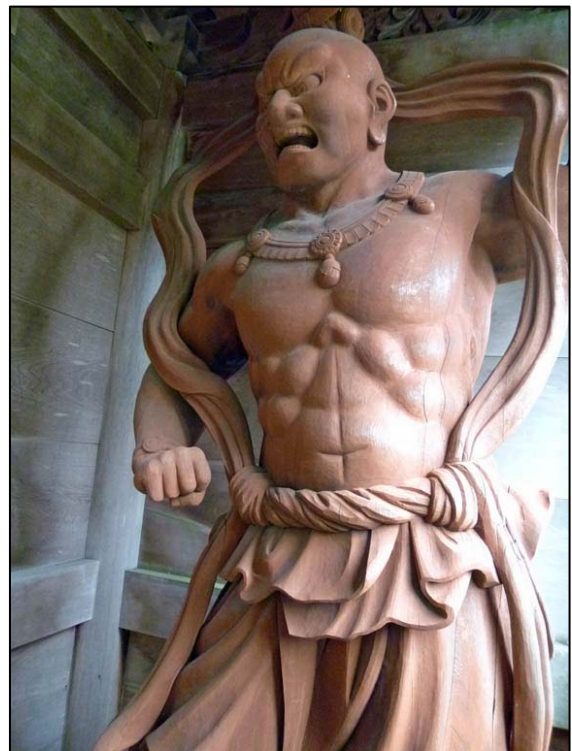
【雷山千如寺の大楓】



【紅葉の大楓：他 HP より】



【千如寺境内】



【千如寺山門の仁王像】

第九十六回吟行記

平成二十四年十月十二日(金)

響灘ビオトープと若松港 (北九州市若松区)

参加者 勝利 佳与子 節子 光子 由紀子

工業都市・北九州に稀少種の楽園ができた。その名を「響灘ビオトープ」と言う。十月六日に開園したばかりの園には絶滅の恐れがあるとされる動植物も生息している。この辺りは、もとは廃棄物処分場として建設残土や不燃物がれきなどの埋立地としていた場所で、1980年代北九州市が工場などを誘致する計画を立てたが、なかなか進出する企業が決まらず、放置されたままの状態となっていた。その間、埋立地の窪みにたまった水が湿地や淡水池などになり、渡り鳥が羽を休め、蘆などの植物が生い茂り、さまざまな生物が生息するようになったらしい。

「ビオトープ」という耳慣れない言葉と開園のテレビニュースの映像に惹かれ、さっそく吟行することに決める。

十月十二日筑豊線若松駅に節子さん、光子さんを迎え、現地入口にて野田夫婦と合流する。十一時集合予定にしていたが、初めての場所なのでお互い早目に着き、十時三十分にはビオトープに入場する。園の入口には、生息する動植物を紹介する「ネイチャーセンター」があり、パネルや実物を



展示している。その中に絶滅危惧種に指定されているベッコウトンボ、チヨウヒなどの姿がパネルとともに詳しく説明されている。

係員から首に下げられる入場許可札を渡され園内に入る。廃棄物処理の埋立地とは思えぬ湿原に目を見張る。順路に沿って池辺を歩くと一面の芦原に爽やかな秋風が吹き抜けていく。近くの大型風力基がゆっくり回り、曇雲が一層秋を感じさせる。この辺りは一般の人の立ち入ることのない工業団地で、今も大通りを挟んで東側の工場には大型トラックが往来している。こういう工業団地に、ドーム六個分というかくも広い敷地が放置されたままというのは、北九州市民にとって税金の無駄遣いというものだろうが、企業誘致から大きく計画を変更し、湿地の保全にかじを切ったことは結果的に成功している。開園から一ヶ月で来園者一万人を超す人気ぶりだ。工

業都市でありながら環境都市を目指す北九州のシンボルの一つになるだろう。

葉に止まりたるとんぼうを見失ひ

佳与子

あらぬ方からも一羽や鳥渡る

節子

いととんぼ沼のほとりの草の上

光子



木道のような見学通路から葦原を覗くと、水面には水馬、水中にはメダカらしい小さな魚が沢山泳いでいる。鳥の鳴き声も、空や葦原から聞こえてくる。野鳥の観察小屋もできている。見晴らし台から広がる葦原が見えるが、半分以上は立ち入り禁止の保護区域になっている。各地で水辺の生物を調べている福岡県立北九州高校「魚部」の部員達が調査に関わっているらしい。九州初の「ババアメンボ」などを発見したり、月に一、二度部員達が湿地に入り、来園者に採取した生物を説明しているという。携帯ばかりいじっている若

者が多い中、このような活動に参加しているニュースは喜ばしい。

蘆原の鳥観察ののぞき穴

節子

回復の足取り確と花野行く

光子

蘆原に木道続きいわし雲

由紀子



正午ちかくなつたので若松駅近くの商店街に行き昼食。客が入る度太鼓を打つ「赤提灯」の定食を頂く。石炭の積み出しに賑わった時代から寂れたとはいえ、再び若松に活気を取り戻す取り組みがされている。人通りは多いとは言えないが、本町あたりはシャッター通りにはなっていない。句会場に「旧古河鉱業若松ビル」の部屋を借りたので、洞海湾を臨む海岸



通りのデッキ辺りを吟行。潮風と往
来の船、若戸大橋など句材は多い。
それぞれに「こんぞう小屋」の中を
見学したり、桟橋近くを歩いたりし
ていると、釣竿を持った男性が一人
自転車でやってきた。自転車を立て
かけ、直ぐに目の前の海に釣糸を投
げ込んでいる。何か釣れている。そ
ばに寄って話しかけると、気さくに
応じてくれ、蓋付きのバケツの中
の小さな蛸を見せてくれる。知り合
いから頼まれて蛸を釣っているらし
く、釣れた蛸を売ってこづかい稼ぎ
をしているという。面白いほどに
次々に蛸が釣れる。

自転車で来るは蛸つり秋の海

節子

やすやすと蛸釣り上がる秋日和

光子

餌付けぬ糸に蛸獲る秋の晴

由紀子

投げ釣りにすぐ釣れる蛸秋の晴

佳与子

秋空に蛸かかりたる棹撈り

節子



「旧古河鋳業若松ビル」の
会議室の一室で句会。隣の会
議室から演歌が聞こえてくる。
カラオケ教室があつているよ
うだ。北九州市が市民に開放
しているので社交ダンス、詩
吟、ヨガ等々沢山の倶楽部が
登録利用している。光子さん
は博多座で海老蔵の舞台を観
劇予定で句会には参加せず吟
行のみ。「吟行日に海老蔵？」
と冷やかに言い放ちつつ、句
会にも是非参加したい光子さ
んの熱意に温かく送り出す。
勝利さん、佳与子さんの参加
で句会が一段と句会らしくな
り、皆の句評などに真摯に向

き合つてくれる勝利さんの姿が印象的である。

この吟行句会前、九月三十日〜十月一日の「中秋の名月」と「みあれ祭」
の見学で再開した佳与子さんの吟行参加は喜ばしいことで、今回のピオト
ープと港の見学も疲れない程度にと思っていたが、しっかりした足取りで
二時間以上歩き回った。

特別に行なわれた「名月とみあれ祭」の吟行句を掲載しておきます。

るのこづち太極拳の足に付け
節子

田の境らしき辺りや彼岸花
勝利

友も観てをらんこの月懐かしき
勝利

山の端にうす明かりして無月かな
佳与子

深更の十五夜森に沈まんと
佳与子

雲厚き空十五夜を隠したり
節子

雲少し薄れて円か今日の月
由紀子

神輿乗る二艘の船や浦祭
由紀子

大漁旗なびく船団浦祭
由紀子

七浦の漁船総出や秋祭
佳与子

パンフレット配るも漁師浦祭
佳与子

観覧の席はかもめに浦祭
節子



穏やかな潮に大祭みあれ祭



節子



【響灘ビオトープ】



【ビオトープ内の覗き窓】



第九十七回吟行記

平成二十四年十一月九日(金)

参加者 勝利 佳与子 節子 光子 真理子 由紀子

瀬板の森と曲里の松並木 (北九州八幡西区)

今回久しぶりに全員参加の吟行となった。吟行地の「瀬板の森」は何度か足を運んだことがあるが、野田夫婦と真理子さんは初めてらしい。ここは黒崎に工場のある三菱化学の貯水池だった用地を北九州市が整備をして平成九年より開放している公園。貯水池をはさんで西側には展望台やアスレチックの遊び場があり、対岸の東側にはパブリックのゴルフ場がある。池の周囲のこんもりと木々の茂った道は散歩にもってこいの場所である。十一月九日十時半を目安に現地集合。節子さん、真理子さんを折尾駅から車に乗せ南口に予定通り到着。野田夫婦、光子さんの車も直ぐに到着。さ



つそく公園を散策する。

入口付近には萩が刈られずに枝を伸ばし、少し日陰になっている所にはシダ類が群生している。紅葉の始まった森は穏やかな秋の日が差し込み、風もなく空には白雲が浮かんでいる。気温二十度と絶好の吟行日和である。散歩する人、ジョギングをする人などとすれ違う。

挨拶を交はす山道冬いちご

光子

山道に行き逢ふ人や冬ぬくし

節子

雑木林の細い道を抜けると、明るい銀杏黄葉が目飛び込んでくる。タイワンフウの木やアメリカフウの木はまだ紅葉していない。小さな広場になっているので、犬を連れて散歩している人も立ち止まり一息ついている。木の橋を渡ると団栗が一面に落ちてい。踏まねば先へ行けぬほどで、見上げれば椎か檜か大木の枝が頭上を覆っている。どこからか鴉の声に混じって笹鳴きが聞こえ、池には通し鴨がスーッと対岸に向かって水脈を引いている。木漏れ日の道は気持ちよく、時間が過ぎるのを忘れるほどである。





ふた筋の水脈鳴のひく湖平ら

由紀子

つてはいられない。

倒木の割れ目定かに秋の風

由紀子

蜘蛛の囿に落葉架かりて落ちきれず

勝利

水脈ひいて乱す鳥影冬の水

光子

辺りに木なき高さより紅葉降る

節子

冬ぬくし四人の歩調揃ひをり

光子

歩きゐることの楽しく落葉道

節子

橋渡る先かさこそと木の実落つ

光子

笹鳴の遠慮がちなる下山道

節子

鳩沼のにごりに潜きたる

光子

破れ囿の中に骸の冬の蜘蛛

光子

鳩もぐれば速し水に透き

真理子

紅葉谷より人の声鳥の声

佳与子

時計を見ると十一時半を過ぎている。まだ半分も歩いていない。食事の予約時間を

返事して紅葉中より現れし

佳与子

遅らせてもらい、展望台からざっと一望し、「もみじ谷」へ抜ける道へと戻る。公園の

自転車を押して上がりぬ紅葉坂

佳与子

シンボルでもある展望台の広場の下には

ジョギングの人下り来たる紅葉坂

由紀子

「水の丘」といって水路が引かれ、貯水池

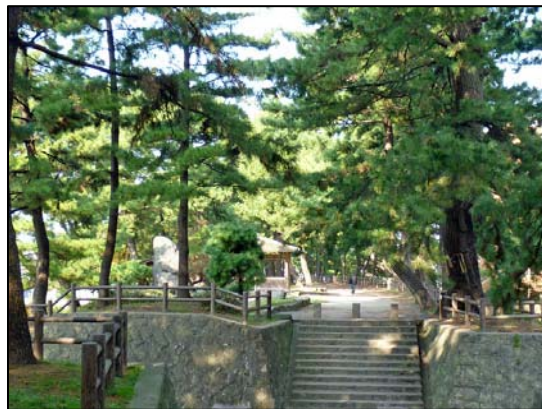
木の実降る森に呼び合ふ鳥の声

由紀子

の方へと流れている。広場の斜面の草や水路脇の櫛やハナミズキの木々、「水辺のテ

ラス」に並び立つラクウショウ（沼杉）など、いかにも晩秋から初冬の風情で去りたいが、駐車場までの距離を考えると留ま

「瀬板の森」を後にして、ホテルクラウンパレス（旧プリンスホテル）に向う。車で十五分位かかっただろうか。十階の日本料理店「七福」の窓際の席から黒崎の街を眺めながら昼食。専門店街のプロムナードもトマトの



温室もテニスコートも無くなったが、ここに来ると子育ての頃を思い出す。昼食後、横の長崎街道の松並木を散策しようとホテルを出る。長崎街道の起点の小倉から黒崎、木屋瀬、飯塚、内野、山家、原田（筑前六宿）と続き、佐賀、長崎と入って行く。当時の松は二本のみ残り、ほとんど後に植えられた松だが、昔日の面影を残した街道として整備されている。

綿虫や松の街道暮れ初めて

真理子

この辺り長崎街道新松子

佳与子

四阿の屋根の草々紅葉して

佳与子

冬木松並木長崎街道に

光子



テニスせしコートなりしが草紅葉

由紀子

レッスンを帰る娘らしく暮早し

勝利

日が傾き、少し体も冷えてきたのでホテルに戻る。喫茶店で句会もいいが、ちようどロビーの端にテーブルが三つほどあり、誰もいない。テーブルと椅子を寄せ句会。十六時解散。

翌日は雨降り。全員揃っての穏やかな一日を過ごせたことが何よりである。



【水辺のテラス】



【瀬板の森公園内】

第九十八回吟行記

平成二十四年十二月七日(金)

参加者 勝利 佳与子 節子 真理子 光子 由紀子

貴船神社・レストラン「公孫樹の木」(北九州市八幡西区)

酷暑の夏が過ぎると、秋は短く寒い冬となった。十一月下旬から冷え込みだし、十二月はほとんど十度前後の気温が続いている。例年通りの気温なのだが、地球温暖化が盛んに言われている昨今、たまには暖かい日があればいいのと思う寒さである。特に日本海側に面した北九州の冬の空は、いつもどんよりと曇りがちで、すっきりと晴れた日が少ない。せめて皆で集まって楽しい一日を過ごせることが出来ればと忘年句会を企画する。

十二月七日、十時三十分を目安に八幡西区鳴水にあるレストラン「公孫



樹の木」の駐車場に集合。開店は十一時三十分だが、場所が分かり難く、駐車場が停め難い。看板はあつて無きがごとくの小さなもので、初めてだと入口が分からない。初めて訪れた二年前、友人の運転する車は地図を見ながら行ったにもかかわらず、この辺りをぐるぐる回り、とうとう郵便局で道を聞くはめになってしまったことがあるので、今回早目の集合にして、食事前に周辺の散策とした。節子さん、真理子さん、光子さんに乗せ、黒崎駅から直行する。野田夫婦の車もすぐに到着し、全員参加の忘年吟行句会を喜び合う。

暖房に慣れて寒しや降車駅

節子

何はさておき年忘れいそいと

節子

十字路の多きこの道石路の花

佳与子

黒崎駅から十分ほどの鳴水地区は低い山の迫った古い住宅街で、道が狭く坂がかつている。レストランの手前にある神社を吟行しようと少し坂を下る。神社への石段は急だが、あの木この草と手に取りながら、おしゃべりしながらゆっくり上る。この貴船神社の由緒案内を読み、境内を見て回るといっても、こじんまりとした境内に人気はなく、建替えられたのか比較的新しい本殿と神輿倉とブルーシートで覆われた土



俵らしきがあるのみである。神輿二台が硝子越しに見える。本殿の裏手の小山に上っていくとお墓がある。神社の奥に平等寺という寺があるからであろう。境内を覆う大木に「猿のこしかけ」が生えているのを見つける。

冬陽差す向うの道へ渡りなむ

勝利

社へと急な階段枇杷の花

佳与子

シートかけられて紅葉の散る土俵

節子

神輿倉狸眺めてをりそうな

光子

目につきし猿のこしかけ冬ぬくし

由紀子



食事の予約時間
間が近づいてきたので、神社のゆるやかな坂道を下り、道沿いの駐車場から銀杏のまっ黄色の落葉の庭を見下ろしながらレストランに入る。
この建物は、八

幡製鉄所の会長だった人の邸宅だったとネットに書かれているが定かではない。違うにしても丘陵を活かして建てられた屋敷は池や築山を配して、なかなかの豪邸である。店名が「公孫樹の木」というだけあって、真ん中の銀杏大樹が目を引き、散り切った黄葉は絨毯の如くである。水車は景観のためだけではないが、川からの水を汲み上げ廻っている。夏には、この辺りに蛍が舞うそうである。



竹樋の朽ちなんとして寒の水

勝利

音もなく廻る水車に銀杏散る

佳与子

極月の川を流れてゆく芥

由紀子

点景の水車気になる時雨かな

真理子

にじり口銀杏落葉に閉ざされて

真理子

プロパン車来てゐる厨年用意

真理子

ほたる棲む川にも銀杏散り込みて

光子



レストランの中も広く、テーブル席は二部屋の広間の窓際のみに置かれている。どの窓からも庭が見えるようになっていて。個室もいくつかあり、そこからも各々庭が見える。落ち着いた雰囲気のレストランにくつろぎ、さつそく料理をいただく。時折隣の部屋からも笑い声が聞こえてくる。どの席もどの部屋も女性客で埋まっている。

どの部屋も声高らかに年忘れ

光子

笹鳴の傍にしばらく居ることに

節子

どの会もそれぞれ大事年忘

真理子

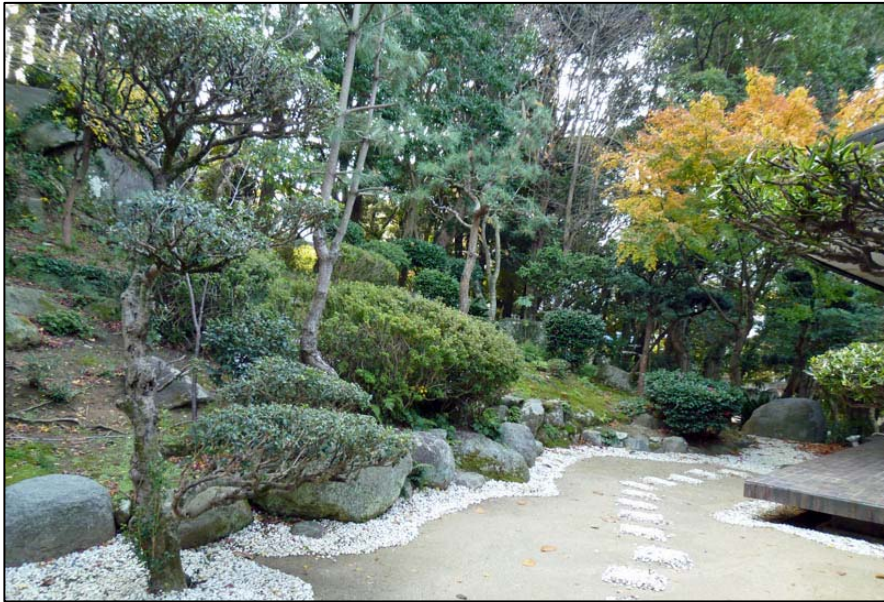
ランチタイムの終わる十五時までには句会ができるかどうか微妙だが、少し庭を散策して句を拾う。部屋から見える庭に廻ると、山なりの木立に千両の赤い実や石菫の花の黄色が目を引く。人が歩けるように階段状になっている径は、あまり陽が差さないので湿った落葉に足が滑りそう。早々に銀杏の庭に戻る。

時間内になんとか句会を終えたものの、食事の片付けなどの慌しさが残るものだったので、黒崎駅横の井筒屋デパートの甘味処「さくら庵」に寄り、句評を交え



た雑談で忘年句会を終える。無事に楽しく一年を過ごせたことに感謝。

【レストラン「公孫樹の木」の庭園】



【「公孫樹の木」庭園】



自選句

(四十四—四十九)

自選句 四十四

「平成二十三年十二月投句」より

雪つもるまでの頼みの冬菜かな
炭ついでより本題に入りけり
雪吊や城は復古の赤瓦

光子



鳴き声を合図に進路変える鴨
たっぷりの湯船に浸かりきく木枯
村長が神主になり暦売

節子

身に添へる幸を語りて年忘
焼けし藪紙に包みて抱かせくれ
どの頁にも夢の種日記買う

真理子

冬ぬくし猫の寄合午後三時
冬蜂の胎児のやうに眠りをり
ほろ酔いの客に絡まれ暦売

勝利

新しき切株いくつ臭木の実
石垣に背なか預けて日向ぼこ
ありふれた我が姓なれど根深汁

佳与子

記帳する子規の文机冬日濃し
スカイツリーなどは知らぬ都鳥
鴨場より汐留ビルの冬灯

由紀子

「平成二十四年一月投句」より

暁の朝となりゆく冬の空
ひそやかに山に点じて式部の実
山下る道は二手に帰り花

光子



松山のリフトより見る帰り花
満月の未明の伊予に入港す
境内に低く茶の花巡らせて

節子

かりそめの終止符なりし冬の月
白萩の卒寿の病越えし文
麦蒔くや筑紫次郎のふところに

真理子

口惜しと川辺の尾花雑ぐ君は
夕日背にタンポポ綿毛影絵めき
秋落き上弦の月第二幕

勝利

闘病へ二人三脚冬ぬくし
社宅より始まりし句座芭蕉の忌
軽々と流れてゆきぬ式部の実

佳与子

染糸を小積む工房小鳥来る
時雨忌の今も時打つ辰鼓楼
往還の松の太幹冬草

由紀子

自選句 四十五

「平成二十四年二月投句」より

路地口に細き案内碑暖かし
獵名残獵師いつもの帽子にて
強東風の女びしりと馬に鞭

真理子



タオル干す手に寒風の容赦なく
花器の脇梅を包みて英新聞
自家製の畏眼で撫でて獵名残

勝利

低頭の白きうなじに風花す
裸木の等間隔に影黒し
外濠のなぞへ這う風下萌る

由紀子

ゆびきりの手のやはらかく春を待つ
迷ひなき人の言葉や寒牡丹
冬ぬくし我を友とす人ありて

光子

腰痛を忘れて拾う年の豆
針供養木綿豆腐が十二丁
針供養和裁士会の幟立ち

節子

「平成二十四年三月投句」より

種芋の芽を見極めて鎌を当て
春宵に酒肴凝らして妻の留守
外出を許されぬ身に鳥帰る

勝利



四百年続く医家とや梅真白
御典医の調度置かれて古雛
故郷の雛へ同窓会を兼ね

由紀子

水温む浮葉の茎のゆらぎ見え
草の芽を踏むさへ樂し筑紫野路
一ト月を遅れて梅の咲き揃ふ

光子

初花に会ふ宮までの回り道
啓蟄の森に何やら出でし穴
ボタ山は三角形に山笑ふ

節子

如意宝珠春の景色をさかしまに
鮎汲みの川と伝へて神代より
剪定の音の間遠き茶を淹る、

真理子

自選句 四十六

「平成二十四年四月投句」より

散るさくら大縄跳びの輪の中へ
莊といふ集落今に霞む山
名を当ててみたり御苑の八重桜

由紀子



愛でられることなく咲いて杉の花
桜貝シャンパングラス飾り棚
古の水城の堤春の空

光子

教習所水城のそばに出来て花
花の屑水城の丘の小径にも
春の夜のまだ終わらない長電話

節子

ゆずらるゝ机もろとも桜貝
裏返し見れば青濃き桜貝
桜貝小箱に潜む波の音

真理子

芽が出たとはしゃぐ孫みて苗代田
綿菓子か小さき手毬か八重桜
指重ね花の匂を練るおさげ髪

勝利

「平成二十四年五月投句」より

ひとかかえ菖蒲切り来る男かな
沖はるかすでに碎けて立つ卯浪
花あふち浦々に揺れ岬道

光子



新しき幣吹き上げて卯浪かな
天草を広げ万葉歌碑の寺
碎け散る波か千鳥かわからなく

真理子

軽鬼の子の水面を走る速きこと
麦を刈る畦の携帯鳴り続け
藤にゐるバッグが連れの目印に

勝利

出窓にも犬の置物金盞花
角々と動きて速しあめんぼう
おひねりの川面に落ちて舟芝居

佳与子

注連ゆらし卯浪逆巻く夫婦岩
伊都国の浦巡り来し花あふち
月赤し昼夜となくつちふれる

由紀子

自選句 四十七

「平成二十四年六月投句」より

余白てふ涼しさ描く墨絵かな
襟もとに付きし螢の首を見せ
産湯の子晒しに抱く青簾

真理子



萎びたる実を隠し咲く花柘榴
一時間バス一本や茄子の花
少年は髪をはねあげ競べ馬

勝利

屋形船繋ぐロープに五月雨るる
ででむしや独り身軽でつまらなく
暮れきらぬ空より一つ螢の火

由紀子

母育て父の供へしあやめかな
初物の西瓜に長寿願ひつつ
新緑の山々雪の飯豊山

光子

「平成二十四年七月投句」より

八幡の池に子供ら捕虫網
覚めやらぬ耳にキリキリ蟬の声
吾がためにつけし香水匂ひくる

真理子



信号を待つてゐる間の雲の峰
子燕やきのふより首長くなり
胡瓜もみ二人の味に作り分け

勝利

水草より飛び出し鶴の喧嘩かな
常夜灯低く灯して夏萩に
人影をとんと見ぬ家花ざくろ

佳与子

荒梅雨や一夜に沈む峽の里
梅雨出水一村の橋流しけり
故郷の映るテレビや梅雨出水

由紀子

すでに無き社宅夾竹桃咲いて
あたたまるものも一品夏料理
一木で森なす古木梅雨深し

光子

遠雷を眠りの中で聞いている
大樟の洞の黒々梅雨湿り
眠る子に団扇の風をゆうるりと

節子

自選句 四十八

「平成二十四年八月投句」より

遠海に夏雲の影流れ行き
烏瓜開く時刻に誘い出で
産湯の子晒しに抱く青簾

勝利



萎びたる実を隠し咲く花柘榴
閉店の円座重ねてある蕎麦や
手際よき女深爪円座編む

佳与子

炎天の浜まぶしさに踏み込めず
ででむしや独り身軽でつまらなく
建替への決まりし駅舎夢の花

由紀子

八月や志操確かと父の言ふ
秋暑し湿布貼りつつ働けり
夏の空ホテル病院向き合ひて

光子

小舟より届く人声夏の浜
出窓より見る朝顔の裏の顔
西瓜なら食べられるかもしれないと

節子

風に向き飛んで流され赤とんぼ
秋立つやはたとせを経し松の風
ぼら跳ねて海の続きの空広し

真理子

「平成二十四年九月投句」より

岩肌に次々に影赤とんぼ
公園に猫の定席良夜かな
スムーズに車流れて良夜かな

佳与子



山一つ越えて伊都国稻の秋
山小屋の窓の隙より霧流る
知らぬこと多し秋蚕もその一つ

由紀子

遺すこと要らぬ暮らしの良夜かな
回廊に立ちこめる霧羅漢にも
秋水のあふれうるおす寺領かな

光子

道の辺に見つけしばらく鳳仙花
お茶室に籠る一日醉芙蓉
次々に草の花の名つぶやいて

節子

授けられ掌に擦る香の秋
内陣の錦を霧に開け放ち
見送りの父の肩触れ良夜かな

真理子

山の端にあの家屋根良夜かな
秋蚕かな軽く小さき繭ひとつ
寝転んでみる蜻蛉の多きこと

勝利

自選句 四十九

「平成二十四年十月投句」より

雨雲の突と去りゆき望の月
水澄むや絶滅危惧の蜻蛉棲む
露光る千羽鶴てふ白き薔薇

由紀子



遅れ来る人を待つ間の秋時雨
鳥運び風の育てし花野かな
秋の夜を切り裂いて来る能の笛

光子

雲厚き空十五夜を隠したり
嗅いでみるへくそ葛と知りながら
水平線埋めつくす舟浦祭

節子

鳴らしきひと声高き夕明り
萩刈て鐘楼ひとつ残るかな
萩刈りて風色失せてしまひけり

真理子

田の境らしき辺りや彼岸花
秋時雨川面に溶けし鷺一羽
天高くパラグライダーまだ上がる

勝利

葉に止まりたるとんぼうを見失ひ
パンフレット配るも漁師浦祭
投げ釣りにすぐ釣れる蛸秋の晴

佳与子

「平成二十四年十一月投句」より

目貼してお手玉あそび豆の音
挨拶を交はず山道冬いちご
冬ぬくし四人の歩調揃ひをり

光子

歩きみることの楽しく落葉道
軽々と紅葉落葉の袋寄せ
山道に行き逢ふ人や冬ぬくし

節子

塵と見えをりしが百合の返り花
冬の星屑を落として音もなく
気働き行き届く娘や冬日和

真理子

お小言をゆっくり噛んで温め酒
独り住む母や目貼にガムテープ
故郷の迎えは厚く帰り花

勝利

小春日や禰宜と緋鯉の話など
雨の日の車庫に並べて菊の鉢
忍び寄る鷺をかわして冬の蝶

佳与子

倒木の割れ目定かに秋の風
ジョギングの人下り来たる紅葉坂
貼り終えし障子明りに墨を磨る

由紀子



あとがき

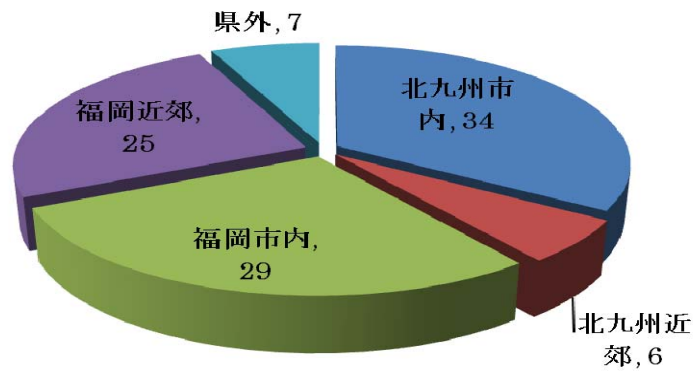
毎月のホームページ（以下HP）掲載は一ヶ月遅れでの更新が常態化している中、「響風」第八号の発行が昨年同様、五月の連休期間中となりました。

今回の第八号には、九十八回吟行記まで編集したものを冊子にしましたが、現在HPに掲載中の分まで含めると約百回（正確には2006年7月の番外編を含むと百一回）となりました。まさに「継続は・・・なり」というところでしょうか。

その約百回分の分析データを掲載しておきます。（データの分類のうち近郊⇨方面と読み替えて下さい）

吟行先の神社でいえば、榎田神社、大宰府天満宮、十日恵比寿神社あたりが、ベスト三でしょうか？

HPの掲載更新の際に、各種分類（神社・仏閣・句碑・花鳥風月等）でのデータ掲載や検索のできる構成ができればとも思っています。いずれ余裕が出来れば・・・と思いつつ、編集後記と致します。



【これまでのHP掲載・吟行場所分類】

ホームページ・編集担当



響 風 - Hibiki Winds -

あしや句会 第8号

平成25年5月発行

発行人：江本 由紀子